

『祖母の手鏡』 吉田桜

祖母は鎌倉に恋をした。鎌倉へは学生時代
修学旅行で初めて訪れたという。その時、鎌
倉の山と海に囲まれた独特の地形と、何百年
と受け継がれてきた文化、そして決して派手
ではなく質素で厳かな佇まいの神社仏閣に、
魅力を感じたのだという。日本全国に「古都」
と呼ばれる街は多いけれど、鎌倉の街と自然
が融合した雰囲気は独特で、訪れる度に違っ
た印象を持つと、祖母は話した。

その祖母に半ば連れていかれるように、私
も毎年鎌倉を訪れた。五年前、祖母との旅行
中、鎌倉彫のお店に入った。

「いらっしやいませ」

店に入った瞬間から、鎌倉時代からつづく、
悠久の時の流れの中に立つような不思議な感
覚を覚えた。高雅で厳肅な空気にもかかわら
ず、人の温かさが感じられるような不思議な
感覚だ。祖母は鎌倉彫の作品一つ一つを熱心
に眺め、旅の思い出にと、手鏡を購入した。

「山桜が彫られているのですよ。」

手鏡の背面には、見事な山桜が優美な曲線で彫られていた。陰影ある彫りと、深みのある漆の色調が美しい手鏡だった。祖母は鏡ではなく、背面の彫りを大事そうにそつと何度も撫でていた。長らくその手鏡は祖母の実家で大切に使われていた。

あれから五年が経ち、もう祖母との旅行は叶わない。思い出の手鏡は、祖母から母の手に移った。毎日使っているにも関わらず、色褪せるどころか、更に陰影の色調は鮮やかに、艶も増したように感じる。時を重ねた美しさというのは、こういう作品をいうのだろう。

母の手に渡った手鏡を見る度に、初めて鎌倉彫のお店で感じた、永遠の時を漂うような不思議な感覚に襲われる。

いつかあの手鏡は、祖母から母、母から私へと引き継がれるのだろう。私も、鎌倉の歴史の一部に加わるかと思うと、文化の偉大さと荘厳さを改めて感じる。